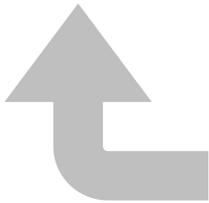


特別支援学校の専門性を求めて



著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

対人援助学会 2020 年次大会において、渡辺修宏先生、小幡知史先生、そして私、二階堂哲の3名で、企画 ワークショップを開催しました。

そのワークショップのタイトルは、「対人援助実践をリポートするこの1冊」でした。

対人援助臨床で行き詰ったら、リポートを試みる。

そんなリポートのスイッチは、もしかしたら良書なのかもしれない。

そんな思いを伝えたくて、思い切って手を上げた企画でした。

第1回から第3回までの“語り”は、共同企画者である渡辺先生、小幡先生によって綴られましたが、今回は二階堂がそのバトンを引き継ぎ、2020年度の対人援助学会の企画ワークショップで私が紹介させていただいた、私にとっての「対人援助をリポートしてくれた良書」について語りたいと思います。

はじめまして。私は、二階堂と申します。

渡辺先生や小幡先生を引き継ぐには力不足ではあるのですが、私の体験を記したいと思っています。

現在、私は、茨城県にある特別支援学校で教員をしています。

初任者の悩み

17年ほど前から、私は、特別支援学校教員として働きだしました。最初に配属されたのは肢体不自由児を主とした特別支援学校で、準ずる教育課程の生徒に世界を教えたり、重度重複課程の生徒の自立活動でリラックスするための体操をしたりしていました。

それまでは教育実習以外の現場の経験がなく、毎日が初めての体験ばかりで、驚きの連続でした。

障害の種類においても程度においても、多様な生徒がいました。そうした多様なニーズに応えるための高い専門性が求められる特別支援学校において、先輩方は自分の専門性と呼べるものを持ち、それぞれの授業で実力を発揮していました。

一方で、自分にはそういったものがなく、様々な障害を抱える生徒に自信をもって伝えられるものがないことを痛感していました。

そして働きながら、専門性を模索する日々が続きました。

A先生と、応用行動分析学との出会い

現場で初任者を指導してくれるのは、クラスの担任、社会科担当のA先生、そして、全体の研修を調整してくださる先生の3名でした。その中でもA先生は、指導の根拠を大切にされている方で、私はその人から大きな影響を受けました。

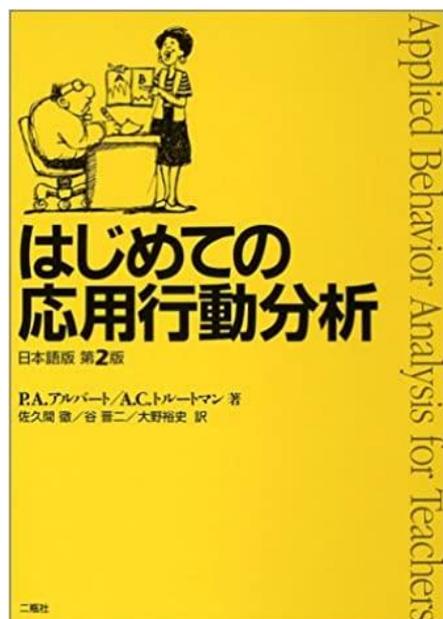
臨床心理士の資格を保有しているA先生は、WISCなどのアセスメントに基づく指導の重要性や、自主研修に参加する意義について熱く語り、その先生の勧めもあって、私は特別支援教育士の資格を取得することになりました。

特別支援教育士は、当時「軽度発達障害」と呼ばれていた学習障害(LD)や注意欠陥・多動性障害(ADHD)、高機能自閉症などの教育の専門家の育成を目指して作られた資格で、2年間、土日や長期休業期間を利用して、理解や支援方法について学びました。

そこで、2004年に発売された「はじめての応用行動分析」という本に出会いました。この本には、それまで悩んでいた障害の重い子に対する客観的なアセスメントや具体的な支援方法が理路整然と書かれていて、衝撃を受けました。これまで悩んでいたことの答えが、すべて書いてあったのです。

早速、本を参考に、唾液でシャツを汚してしまう生徒への介入を行いました。その生徒は、口の中に指を入れてしまう癖があり、そのせいで唾液がでて前掛けやシャツがびしょりと濡れてしまっていました。そこで、非対立行動分化強化を用いた介入として、マラカスを持ってもらうことにしました。マラカスの音が強化子となり、マラカスをずっと手放さないため、口の中に手を入れる行動が激減し、唾液の問題も解決しました。

こんな単純なことで行動が変わることに驚くとともに、この経験から、私は特別支援学校の教師としての専門性を、応用行動分析学の学習と実践によって確立していこうと決めました。



P. A. アルバート (著), A. C. トルトマン (著),
佐久間徹 (訳), 谷晋二 (訳), 大野裕史 (訳) (2004)
『はじめての応用行動分析 日本語版 第2版』

東日本大震災

それから数年間、自主研修に励み、ロボースの早期集中行動介入やポーターページ・プログラム、絵カード交換式コミュニケーションシステム (PECS)、アクセプタンス&コミットメントセラピー (ACT) など、行動分析学 (または応用行動分析学) に基づく様々な介入方法を学びました。

また、A 先生の紹介で、常磐大学で夜間に行われていた行動分析学研究会へも参加させていただき、主催者であった森山哲美先生 (常磐大学名誉教授)、そして、渡辺修宏先生、小幡知史先生と出会い、行動分析学のさらなる奥深さを知ることにもなりました。

そのような中、2011年に起きた東日本大震災が、私の進むべき方向性を変化させました。当時、福島との県境にある北茨城特別支援学校 (茨城県北茨城市) に勤めていたため、地震と津波、そして原子力災害の影響を強く受けたのです。

震災で身内を亡くした知人がいたこともあり、この災害は、生きることの意味を深く考えるきっかけとなりました。ストレスフルな状況が続く中で、この状況を打開すべく ACT を

真剣に取り組んでみようと思ひ、本を何冊か読んでみましたが、よく理解できませんでした。とくにヘキサフレックスの左側に該当するマインドフルネスが難しく、実際に体験する以外にはないという結論に至りました。

実際にマインドフルネスの体験ができる場所を探したのですが、どこも参加費が高額で挫折しました。代わりに見つけたのが、マインドフルネスの源流である小乗仏教の瞑想法が無料で学べる施設でした。

勇気を出して、その千葉県にあるヴィパッサナー瞑想センターの10日間合宿に参加しました。そこでは、最初の数日間、鼻から出入りする呼吸をひたすら観察するように指導されました。そして、講座が進むと、今度は身体感覚を観察するように指導されました。この講座では一貫して、痛みや心地よさを客観的に観察することだけを指導されました。

この、身体感覚を冷静に、ありのままに観察する術を獲得できたことが、教育現場でも役に立つこととなりました。マインドフルネスな態度を保つは難しく、日々実践をしているのですが、瞑想で迷ったときに参考になっている本が、2016年に発売された「自由への旅 マインドフルネス瞑想 実践講義」でした。平易な文章で瞑想のヒントが書かれていて、初心者から上級者まで瞑想を実践するうえで参考になる本です。



ウ・ジョーティカ（著），魚川祐司（訳）（2016）
『自由への旅「マインドフルネス瞑想」実践講義』

そして現在

応用行動分析学を実践していくうえで、生徒にとっての環境側にいる「私」がマインドフルネスな状態を保つことの重要性を、日々感じています。応用行動分析学の知識と技術とともに、「介入している自分」と、「介入される側の児童・生徒」を注意深く観察し、自分と子供たちが「共にある」ことを大切にしています。

まだまだ十分な実践には至っておりませんが、尊敬する森山哲美先生や渡辺修宏先生、小幡知史先生の実践を励みに、対人援助職であることを誇りとしながら、今後も働いていきたいと思っています。

つづく